

研究課題	仏教絵本の研究 —宗祖伝絵本の形成—
研究代表者	森 覚（文学研究科比較文化専攻研究生）

1 研究の目的

本研究は、仏教絵本とその下位カテゴリである宗祖伝絵本を考察対象とする。仏教絵本とは、日本国内で大正時代から出版されてきた仏教的思想を反映し、仏教的事物について表現する絵本ジャンルである。狭義的には、仏教の布教を目的とした絵本、寺院参拝の記念絵本といったものをいう。下位カテゴリの宗祖伝絵本は、仏教の一派を開いた宗祖の伝記絵本である。この類の絵本は、仏教絵本が現れた当初から現在に至るまで出版されており、仏教絵本の代表的な範疇の一つになっている。

日本の書店には、児童書コーナーの一角に宗教の絵本を取り揃える書棚がある。宗教絵本の多くは、クリスマスや聖書に関連するキリスト教絵本である。書店によっては、『古事記』などに題材を求めた神道絵本も並ぶ。ところが仏教絵本がこうした売場に置かれることは非常に稀である。そればかりかこのカテゴリの作品は、図書館や資料館でもまとまった数の蔵書コレクションが存在しないことから、専門分野である絵本研究や児童文学研究でも、長い間その存在に着目してこなかった。

とはいえ、今日まで出版された仏教絵本は、誰にも気づかれないほど作品数が少ないわけではない。今回、調査収集のために作品目録を作成したところ、厳密な意味での仏教絵本は314タイトルあることが確認されている。さらに仏教絵本の周縁的な作品108タイトルを含めると、その数は422タイトルにのぼる。これは古書店、仏教書専門店、インターネット通販、有名寺院や寺院門前の土産物店から入手した作品と、上野にある国際子ども図書館の蔵書検索システム「児童書総合目録」で確認した作品の合計数だが、いまだ発見されずに埋もれたままの作品は多くある。

本研究では、こうした研究の空白を埋めるため、読者や研究者に注目されなかったこの仏教絵本について明らかにしたいと考えている。その研究成果は、絵本研究や児童文学研究だけでなく仏教文学の僧伝研究にも提供できるものにする。具体的な趣旨としては、仏

教絵本の定義とカテゴリ体系、媒体の成立と変遷、ならびに仏教絵本の代表的な下位カテゴリである宗祖伝絵本を形成する表現手法について論じる。また、仏教絵本は大正時代にキリスト教の児童布教活動から影響を受けて成立した媒体である。そこで、絵本という媒体によって表現される宗祖の伝記について、仏教とキリスト教との影響関係からも論じる。

2 研究の経過

2009年は、博士論文を執筆していた関係から、給付された平成21年度大学院学術研究助成金の用途は、論文に直結する一次資料の入手と書籍の購入に全額を充てた。ここでの一次資料は、仏教絵本の作品のことだが、現在、仏教絵本を収集している機関がないため、本研究では、論文と並行して仏教絵本目録に記録する作業を継続的に行っている。仏教絵本は、言語だけでなく図像を分析することから、図像学や記号学、仏教を扱った伝統的媒体である絵巻物や絵解き研究関連の書籍も購入した。また、仏教絵本が登場した時代背景を把握するため、近代日本仏教の研究書を購入し、一次資料を分析する参考文献として扱っている。

2009年6月27日には、京都女子大学で開催された第12回絵本学会大会で、「宗教絵本ではない『日蓮上人』講談社の絵本によるイデオロギーの呼びかけ」と題し、研究発表を行った。この発表は2009年3月の段階から準備を進め、博士論文の作成と並行して発表に備えた。

2009年6月から7月にかけては、協力編集委員として朝倉書店から2011年に刊行される『絵本の事典』の「仏教絵本」と「桃太郎絵本」記事を執筆した。この執筆依頼は2007年6月に承諾し、2008年3月に原稿を執筆したが、その後、追加の執筆依頼があり、再度原稿を書くことになった。2010年の時点では、編集部での校正作業を経て、8月から9月にかけて最終チェックの作業に入っている。

朝倉書店の『絵本の事典』では、これまで学会などで発表した研究をふまえて記事の執筆に取り組んでい

る。その経緯を説明すると、まず2005年6月の絵本学会において、「明治14年の赤本『桃太郎鬼ヶ島でん』」という絵本研究関連の研究発表を行った。すでに児童文学研究には、お伽噺である桃太郎絵本と、近代国家体制下における戦意高揚の役割をめぐる研究がある。そこでは、明治20年代より桃太郎絵本のナショナリズム的軍事描写が顕著になったと指摘される。本発表はこの論を覆すものとして、すでにナショナリズム的軍事描写がみられる明治14年の赤本『桃太郎鬼ヶ島でん』を紹介した。この発表内容は、2007年3月刊行の『大正大学大学院研究論集第31号』に、論文「明治14年の赤本『桃太郎鬼ヶ島でん』」として掲載された。

絵本学会の発表に続いて、2005年10月には、大正大学大学院学内学術発表会において「仏教絵本『わたしたちのほうねんさま』について」を発表した。発表では、浄土宗監修の宗祖伝絵本『わたしたちのほうねんさま』の読者に念仏を实践させる表現などについて紹介した。翌2006年7月の日本比較文学会東京支部7月例会では、「仏教絵本を読む」という題で、いくつかのテキストをもとに宗祖伝絵本の概略を説明した。ここでは、研究テーマを宗祖伝絵本に絞り、機能体分析の手法を用いてプロットの構造を紹介した。以上の発表は、いずれも2009年6月の第12回絵本学会大会における研究発表と共に、博士論文の関連研究となるものである。

3 研究の成果

具体的な研究成果としては、第12回絵本学会大会で研究発表した「宗教絵本ではない『日蓮上人』 講談社の絵本によるイデオロギーの呼びかけ」と、博士論文『仏教絵本の研究 宗祖伝絵本の形成』、仏教絵本のデータベース「仏教絵本総合目録」があげられる。

第12回絵本学会大会で発表した「宗教絵本ではない『日蓮上人』 講談社の絵本によるイデオロギーの呼びかけ」では、1951年に発行された講談社の絵本『日蓮上人』にみられる国家のイデオロギーの呼びかけを考察した。

日蓮は、鎌倉時代の仏教界で独自の教説を展開し、僧侶の立場から鎌倉幕府の政治体制を批判した日蓮宗の宗祖である。その信仰に生きる姿勢は、人形浄瑠璃や歌舞伎狂言の演目にもなり、内村鑑三の著書『代表的日本人』などで高く評価されている。一般的に宗派が出版する宗祖伝絵本は、読者に宗祖の偉大さを教え、信仰の規範として宗祖の生き方を示す。それに対して、磯田長秋の絵と加藤武雄の文が語る『日蓮上人』は、

宗祖を子ども読者の手本となる理想化された歴史的偉人として表現する。偉人伝の絵本は、孝行忠義・愛国心・立身出世といった思想を伝えるジャンルとして、講談社の絵本の創刊当初から出版されてきた。その路線は、戦後の第2期シリーズに継承され、戦前になかった宗教者の偉人伝絵本『日蓮上人』の刊行に至る。

『日蓮上人』の物語には、正しい仏教の教えをひろめて日本一の僧侶になるという立身出世の思想がうかがえる。そこでの日蓮は、抵抗勢力からの迫害に遭いながらも己の信念を貫いて行動する精神主義の体現者として語られる。ところがこの作品では、日蓮という人物を表すうえで、最も肝心な部分が抜け落ちている。それは、宗教者の偉人伝であるにもかかわらず、日蓮が唱えた宗教的思想や政治的思想について言及する記述が一切ないことである。その代わりに、戦後の『日蓮上人』には、国家のイデオロギー装置として社会を再生産し、日本の社会に相応しい国民を作り出すための読者にむけたイデオロギーの呼びかけが読みとれる。日本画のスタイルや色彩、言語表現、レイアウトなどに織りこまれたイデオロギーは、終戦によって喪失した日本人の誇りを取り戻すべく読者に呼びかける。研究発表では、とくにこの点を論じた。

2010年現在執筆中の博士論文『仏教絵本の研究 宗祖伝絵本の形成』では、仏教絵本の下位カテゴリである宗祖伝絵本に注目し、各作品の諸表現がいかなる宗祖像、または宗祖伝の物語を形成しているのかについて論じる。論考にあたっては、宗祖伝絵本を論じるまえに、これまで議論されてこなかった仏教絵本の概要について明らかにする。そのため、全7章からなる本論では、仏教絵本について論じてから宗祖伝絵本の総論と各論に入るという構成をとる。構成としては、第1章から第3章までが仏教絵本、第5章から第7章までを宗祖伝絵本の論述部分となる。先行研究は、概念を定義するうえで仏教文学研究と宗教児童文学研究を参考にする。考察方法は、文化記号論やクロスメディア論などの文献に依拠し、意味生成の曖昧性が指摘される図像分析に関しては、絵本研究と図像学の実例を参照しながら客観性の保てる論述を展開する。

第1章では、仏教絵本の内容を定義し、仏教絵本の対象作品を確定する選定基準と16項目からなる下位カテゴリの設定を行う。そのうえで該当作品を分別し、作品分布から仏教絵本の特徴を明らかにする。なお仏教絵本の分類にあたっては、2006年2月から記録しているデータベースがあるので、その概要も併せて説明する。

第2章では、大正・昭和期に活躍した仏教教育家内山憲尚の文献資料と作品テキストの表現を手がかりに、仏教絵本が成立した要因について考える。ここでは三つの議論をおこなう。第一は仏教絵本の作品が日本・インド・中国のいずれかを舞台とした物語に限られることから、このような地域性が生じた要因について仏教の近代化という観点から論じる。第二はキリスト教聖画との類似する仏教絵本の図像について、近代における仏教とキリスト教の関係から論じる。第三は近代絵本に課せられた教育的配慮の観点から仏教絵本の成立を考察する。

第3章では、第1章で分類した諸作品から年表を作成し、仏教絵本分野史をまとめる。年表では、時間軸に四つの時代区分を設定し、大正時代から1945(昭和20)年8月までの第一期では近代の仏教絵本を配列する。1945(昭和20)年9月から1954(昭和29)年までの第二期では戦後直後に出版された作品を扱う。仏教絵本が増えた1955(昭和30)年から1989(昭和64・平成元年)年までの作品は第三期にまとめる。第四期は1990(平成2)年から2009(平成21)年まで、ヒーリング効果をねらった仏教絵本が出版されてくる時期の作品を年表化する。

第4章からは宗祖伝絵本の分析に入る。本章では総論として、菊池良一著『中世説話の研究』などの僧伝研究を参考に、宗祖伝絵本の物語構造を分析し、プロットの類型と表現形式を明らかにする。また、釈迦伝絵本と宗祖伝絵本の物語構造を比較し、その類似性と仏教的聖者の表現方法についてみる。

第5章は各論として作品分析をおこなう。ここで扱うのは1951(昭和26)年に大日本雄弁会講談社から発行された講談社の絵本『日蓮上人』である。日蓮は日本の近代化とともに元寇を退けた護国の英雄として表わされるようになった宗祖である。戦後この日蓮観を反省する意味で発行されたのが『日蓮上人』である。この作品では近代の日蓮観を支えた小川泰堂『日蓮大士眞實傳』を典拠として新しい日蓮像を表現する。分析では日蓮を描き出す視覚言語的表現手法に注目しながら、日蓮伝の変遷も明らかにする。

第6章は、1974年に浄土宗監修のもとで刊行された『教育えほん わたしたちのほうねんさま』に仕かけられた、読者へ信仰体験をさせる表現について論じる。分析では、絵本を見る者の視線と図像の関係に注目し、西洋絵画の分析事例などにもとづきながら、読者を物語世界にひきこむ表現の信仰的效果を明らかにする。第7章では、論考の総括として、仏教絵本の概

要と宗祖伝絵本の表現形式をまとめて提示する。

最後の研究成果報告は、「仏教絵本総合目録」についてである。「仏教絵本総合目録」の作成は、書誌目録として2006年2月19日から継続的におこなっている。このデータベースは、Microsoft Office Accessを利用し、パソコン上で運用するものである。Office Accessのプログラムは汎用性のあるSQL文であるため、比較的他のデータベースソフトに移行させやすい。検索システムの構築にあたっては、『利益につながるAccessデータベース業務改善テクニック』における顧客管理表のSQL構文を参照している。

書誌目録の記載項目は、国際子ども図書館の蔵書検索システム「児童書総合目録」を原型とし、仏教絵本独自の分類項目を追加する。情報項目は、(1)基本的な書誌情報、(2)著作者・編者・監修者・翻訳者の情報、(3)内容と研究・附属の情報という区分で構成される。

第一区分では、作品の基本情報をまとめる。冒頭にある「管理番号」は、データを整理するプログラム上の数字である。作品情報は「所蔵館と配置場所」からはじまる。この項目は、絵本の所蔵場所と図書番号を示す。最大三カ所の所蔵場所と図書コードを表示する。「宗派」は、登録される作品がいかなる宗派教団向けに制作されたのかを示す。記入の際には、事前に登録された宗派名から選択するようになっている。ここでの宗派名は、『歴史読本特別増刊事典シリーズ 日本「寺院」総覧』の「仏教宗派一覧」を参照して設定した。タイトルは、主題を「タイトル」、副題を「冠称付きタイトル」、シリーズ名を「シリーズ」の項目別で表示する。「発行者」と「発行年月日」の欄には、出版元の名称と出版年月日が記録される。最近の絵本は、International Standard Book Number(国際標準図書番号)の付くものが増えている。そこで図書番号は、「ISBN」の項目に表記する。重要な奥付の情報は、「印刷所」「購入価格」「刷り表示」に記載する。仏教絵本には、海外で出版された作品があるので、「テキストの言語」と「出版国」の項目を設置する。ただし博士論文では、海外の仏教絵本を考察対象に含めていない。最後の項目である「形態区分」では書籍形態を記録する。多くの作品は「絵本」となるが、目録には絵物語や漫画、紙芝居といった媒体の作品も登録していきたいと考えている。

第二区分は、編著者・監修者・翻訳者に関する情報をまとめる。「著作者」「編者」「監修者」「翻訳者」の各項目には、それぞれ「氏名」「シメイ」「国籍」「生没年」

「経歴」「備考」の細目を設置する。ここでは制作者の情報を記録する。

第三区分は、作品内容と附属的な情報をまとめる。「ジャンル」と「テーマ」の項目は下位カテゴリと主題テーマを記す。「解題とあらすじ」には作品の趣意をまとめる。読者の対象年齢がわかる作品については「対象年齢」に年齢情報を登録する。雑誌やインターネットに書評がある作品は、「評価度」「批評」の欄に詳細な記録を残しておく。「研究事項」「研究情報詳細」には、各作品の学術研究を記録する。

最後の「件名」は、データベースの検索項目にある「検索条件」と題したフリーワード検索欄に直結している。「検索条件」にキーワードを打ち込むと「件名」の欄にある文字と照合し、「検索結果一覧」に該当作品が検出される仕組みとなっている。ここには著者、出版社、タイトル、テーマ、物語の要点をあらわすキーワードなどを登録しておく。「仏教絵本総合目録」では、このほかにも「宗派」「ジャンル」「出版年月日」「対象年齢」「ページ数」「評価度」「研究事項」という7通りの検索ができる。

4 研究の課題と発展

美術研究や教育学など多様な分野からのアプローチが試みられている絵本研究は、現在、児童文学に属す研究として位置づけられている。しかし絵本は、言語と図像との相互依存によって情報伝達する複合媒体であり、文学的研究手法だけにとどまらない学際的観点が必要である。そこで、本研究を位置づける適切な該当分野となるのが、「各国文学・文学論」を研究対象とする比較文学・比較文化学である。この分野には、比較芸術という下位分野がある。そのなかのクロス・ジャンル研究（東京大学比較文学比較文化研究室「比較芸術」<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/graduate/hikaku-geijutsu.html>）は、言語文化と視覚文化が交錯する複合的媒体、あるいは一つのテーマが文学や絵画などの複数ジャンルにまたがる対象をとりあげる研究である。昨今は、言語と図像を組み合わせる書籍・インターネットなどが普及している。そのような新しい情報伝達手段から諸文化の様相を解き明かしていくためには、このような試みがますます不可欠になってくる。

現在、そうした分野の一角をなす仏教絵本研究には大変高い期待が寄せられている。日本初となる絵本専門事典『絵本の事典』（朝倉書店から平成11年刊行予定）では、「仏教絵本」の項目執筆を、唯一の研究者である私が担当している。また平成11年には、仏

教絵本を大会テーマとした第14回絵本学会大会が大正大学で開催される。仏教絵本は、子どもと仏教とを結びつける仏教文化の様相がうかがえる媒体として、研究の余地が十分にある。この研究に取り組むにあたって達成しなければならない最大の課題は、仏教絵本が単なる子どもの読み物でなく、近現代において様々な文化・思想の影響下で形成したテキストである事実を示すことである。それによって、いままで謎の多かった仏教絵本の実態が明らかになると共に、絵本を学術研究としてとりあげる意義が周知されればよいと考えている。